

クローズアップ

本学教員の研究を
詳しく紹介

赤ちゃんを みつめて

家庭科教育講座 准教授 なか がわ あい 中川 愛

赤ちゃんの魅力

赤ちゃんをみかけると、じっとみつめてしまうことって、ありませんか？赤ちゃんは、大人とは異なる特徴をもつことがわかっています。動物行動学者コンラート・ローレンツは、ヒトだけでなく多くの生物の赤ちゃんに共通する特徴（ベビーシエマ）を報告しています。身体に比べて大きな頭や顔の中央よりやや下に位置する大きな眼、短くて太い手足、全体に丸みのある体型などがその特徴です。このような姿の赤ちゃんをみると私たちは可愛いと感じてしまいます。

赤ちゃんの微笑みや笑顔を見る

と私たちは、嬉しい気持ちや幸せな気持ちになることもあります。最近の研究では、胎児にも微笑みがみられることがわかっています（川上・高井・川上，2012 他）。魅力的な姿や笑顔をふりまく赤ちゃんが、さらに声を出したり、指さしをしたりすると、私たちは、様々な養育行動を行いたくなりますよね。

また、赤ちゃんに触れ合ったことのある小学生に赤ちゃんの感想をきくと、『ぷにぷに・ふわふわ・もちもち・もっちり・柔らかい』といった回答がかえってきました。大人と比べて、水分量が多い赤ちゃんの肌はとても気持ちがよく、これも赤ちゃんのもつ魅力のひとつといえます。

赤ちゃんへの行動

そんな赤ちゃんを目の前にすると、私たちは大人同士とは異なる行動を示します。例えば、語りかけです。マザリーズ(Motherese)や Infant-directed speech (対乳児音声) と呼ばれる語りかけがみられます (Ferguson, 1964; Snow, 1977 他)。例えば、韻律的な特徴（ゆっくりしたテンポ、高いピッチ、誇張したイントネーション）や文法的簡単化（発話の長さが短い）、文法的な表現（非文法表現は使わない）、冗長な表現（少数の語や節を繰り返す）などです。これらの特徴は、文化の異なる世界中の母親や父親、また親以外の人でもみられることがわかっています。

日本の養育者は、子どもに対して特別な語（育児語）を使用することもわかっています。育児語には、擬音語擬態語の使用、音韻の反復、語の般用傾向、接尾辞を付加する傾向、接頭辞を付加する傾向などがあります（早川，1981；村田，1960 他）。

独特な語りかけだけでなく、私たちは、赤ちゃんに新奇なモノを提示するとき、その動作を反復したり、単純化したりします。そ



(図1)生後5か月男児



(図2)生後8か月男児





(図3) おもちゃで遊んでいる姉妹



(図4) 泣いている弟をみつめる兄

れは、Motionese (Brand et al., 2002) やマルチモーダルマザリーズ (Gogate et al., 2000) と呼ばれています。

このように、大人は赤ちゃんとかかわる際、言葉とジェスチャーとを同期させることが多く、新しい言葉と意味の関係を際立たせるようにしています。これらの特徴が、赤ちゃんの注意をひきつけます。また、養育者が、事物や行為、事物の特徴にラベリングづけをおこなうことで、子どものことばの獲得を促進していくと考えられています。

また、生まれて間もない赤ちゃんの視力はほとんどみえていないことがわかっています。しかし、聴覚は、妊娠7か月頃には完成し、胎児期から母親の心臓や腸の音、母親の声や外の環境音を聞いていることがわかっています。そのため、幼い子どもは、視覚情報よりも聴覚情報に敏感であると考えられています。

3歳児と1歳児の子どもをもつお母さんと会話した時のエピソードです。

弟の世話や家事に追われるお母さん。お兄ちゃんは、お母さんの

注意を引くために、一人でできることをやらなかったり、ぐずぐず言ったりするそうです。ついお母さんも「早くしなさい」「一人でできでしょ」と強く言ってしまう。声のトーンは低く、怖い声。そんな時、お兄ちゃんは、「お母さんキライ」とすねてぐずぐず。最後には泣いてしまうそうです。そんな様子を見て、お母さんはさらにいらいらしてしまうといいます。お母さんに、マザリーズや育児語のお話をしました。すると後日、そのお母さんから連絡がありました。『同じ内容でも、声のトーンや間を変えて言うと、子どもの反応が違いました。いつもは険悪な雰囲気になるのに、笑いが起こって、いらいらしませんでした。』とのことでした。幼い子どもとかかわる際に、声調に注目することは、やはり効果がありそうです。マザリーズは、赤ちゃん楽しい快の状態を共有している時にみられる語りかけです。マザリーズを発声している時、私たちは自然と笑顔になっています。また赤ちゃんも笑顔です。先ほどのお母さんも声のトーンや間を変えることで、笑顔がうまれ、笑いが起きたのかもしれない。

きょうだい間の遊び

私はこれまで、大学生や高校生、小学生が赤ちゃんとのようにかかわっているのかを研究してきました(中川・松村, 2004; 2006; 2007; 2010)。その中でわかってきたことの1つは、これまで赤ちゃんとかかわったことがない人は、赤ちゃんに向けて、ほとんど発話を行わないということでした。どうしたらいいのかわからない。何を話したらいいのかわからない。赤ちゃんが好きでかかわりたいと思ってもその方法がわからず躊躇してしまう姿をみてきました。また、保育士を目指す学生へのアンケート調査の中でも赤ちゃんへのかかわり方に不安を感じている学生が多いこともわかりました(中川, 2010)。

これまでの研究は母親など養育者を対象としたものが多く、きょうだいを対象とした研究は多くはないことから、次に、きょうだい間の様子を観察することにしました。乳児と年齢が近く、毎日一緒に過ごしているきょうだいの遊び方は、赤ちゃんへのかかわり方に不安をかかえる人のヒントになるかもしれないと考えました。まだ、数例の事例ではありますが、年上きょうだいは、ことばを話せない乳児きょうだいに対して、名前を呼んだり、発話と行動を伴ったやりとりを行っていることがわかりました(中川, 2012 他)。その中には、乳児の動作や自分自身の動作に擬音語擬態語をつけるだけで遊びが成立していることもありました。例えば、ボールを転がしながら「コロ」「コロコロコロー」と言うなど、声のトーンを変えなが



ら、何度も繰り返し遊んでいました。乳児きょうだいも笑い声をあげたり、手を動かしたり、とても喜んでいる様子が観察されました。動作に言葉（擬音語擬態語）をつけると自然と声に抑揚がつかますよね。表情もやさしくなります。これは、先ほどお話したマザリーズの特徴に似ていますよね。

かかわり方が不安な人は、赤ちゃんとかかわる際、何か特別なことをしなければと意識しすぎているのかもしれませんが。ぜひ参考にしてみてください。

今後について

最近気づいたことですが、私は赤ちゃんが好きだけでなく、赤ちゃんの存在自体に憧れていたようです。

他者に依存しないと生きていけない赤ちゃん。大人は、自然と赤ちゃんの魅力に引きつけられ、さまざまな養育行動を行っています。赤ちゃんはあくまでも自然体です。お腹がすいた時、泣きたい時に泣き、楽しい時、嬉しい時に笑う。感情のままに、自然体で



(図5) 2歳7か月児の作品

いるだけで、その魅力が十分他者に伝わっていて、愛されています。

そんな赤ちゃんをみていると、私ももっと心から湧き出る声（感情）を素直に受け取り、その感情を感じ切って毎日過ごそう! と思ったりもします。

子どもがどんなことを考えているのか。どうやって表現しているのか。どうやって楽しさを共有しているのか。今後も子どもをみつめていきたいと思っています。

学生のみなさんには、子どもを

みる視野を広げて欲しいと思っています。いろいろなものさしで、子どもをみつめると、新しい発見があってワクワクしますよ!

図5の写真は、2歳7か月頃の子子どもがブロックで作ってくれた作品です。さて、これは何にみえますか?この子の気持ちになって考えてみてください。

ヒント:この作品は梅雨の時期に作ってくれました。



プロフィール

家庭科教育講座

なか がわ あい
准教授 中川 愛

専門は、保育学（対乳児行動に関する研究）。

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程修了（2010）博士（学校教育学）。

湊川短期大学講師、准教授を経て、2010年より現職。

